That's きっとす　令和２年１月

天覧山・多峯主山にすんでいる小さな“カヤネズミ”

今年の干支は「子(ネズミ)」。そこで今回は、天覧山・多峯主山にすんでいる「カヤネズミ」の話をしましょう。日本には 17 種のネズミの仲間が生息していますが、その中で一番小さいネズミです。大きさは人間の大人の親指ほどで、重さは 500 円硬貨 1 枚分くらいです。好きな食べ物は、小さな草の種や、バッタなどの昆虫、季節によってはノイチゴなどの果実も食べます。巣作りに特徴があり、イネ科の植物の葉が平行にさける性質を利用して、前足と歯を使って細かくさいた葉を、じょうずにからめて巣をつくります。ススキやヨシなどのイネ科の植物の総称を「カヤ」と呼びます。そのため、この巣作りの材料から和名がつけられたのですね。巣は茎に葉がついたままの状態で編まれるので、まわりの草に隠れていて、注意してみないと気づくことが難しいでしょう。もしもカヤネズミや巣を見かけたら、そっと見るだけにしてあげてください。ガサガサと葉をゆらしたり、近づき過ぎたりすると、カヤネズミはびっくりして、逃げたり、巣を引っ越ししたりして戻らないことがあります。

カヤネズミが暮らすためには、水気があって、イネ科の植物が密生していなければなりません。しかし近年、全国的にこのような草地が少なくなったり、草地の植物の種類が変わったりして、だんだんとすみかになる場所が少なくなってきています。天覧山・多峯主山では、古くから人が雑木林や水田、畑として利用してきたために、いわゆる里山の環境が残されていることから、水気のある草地もあるのです。いつまでもカヤネズミがすめるような豊かな里山でありますように。(長谷川)